保育原理と他科目の架橋を通した学生の理解を深める取り組み

櫻　井　裕　介

The Efforts for Student's Understanding through Principles of Child Care Connected to other Subjects

Yusuke Sakurai

（2019年11月27日受理）

１．はじめに　保育原理と他科目の架橋を通して保育への理解を深める取り組み

本稿は保育者養成課程における、各科目間連携を通して保育関連科目への学生の取り組み意識の向上と保育の計画と内容そして実践への総合的な理解を深めることを目的とした実践報告である。科目間連携の取り組みは学生の授業理解深化や教員の授業内容と方法の改善として取り組まれているところである。例えば、授業改善や関連科目の連携としては、香川ら（2013）において保育者の専門性としての発表能力の育成についての科目間連携を報告している。この取り組みでは、保育・教職実践演習を軸に領域言葉、人間関係を中心にして各表現領域科目とも連携を取り、発表内容の充実、保育活動でのねらいの意義を深めるともに、「価値ある情報を他者に伝達すること」という学生の発表能力の育成に各科目間の連携が重要であることを示している。また、伊藤ら（2014）ではオペレッタという表現領域と領域言葉、表現（身体表現・造形表現・音楽表現）を関連させた授業実践を報告している。ここではそれぞれの科目が重視している点を再確認すること、例えばシラバスを確認して知識や技能、到達目標を比較し共通することや関連・影響し合うものを学生自身が意識して授業に取り組むように伝えることとそれを基にした自己チェックシートに記入させて意識を高める取り組みを報告している。高橋ら（2015）では保育原理と領域人間関係の連携を報告している。保育原理と領域人間関係の授業で子ども理解などについてのワークシートを作成し、保育原理で記入したシートを後の人間関係の授業で使用するワークシートに添付して使用し、授業資料としても科目間連携が図られていた。

本学科では2017年度から継続的に取り組んでいる実践である。この取り組みの前提として、中村学園大学短期大学部幼児保育学科では幼児保育基礎セミナーの中でカリキュラムツリーやカリキュラムマップを示して２年間での学びのプロセスを可視化することなどを通して、各科目間の関連の重要性を説明して学生の学習意欲向上に努めている。しかしながら、学生の意識としては各科目の単位を取ること、試験を通過することに意識があり科目間の相互的な学びや保育の総合的な理解の深化に結びついていないと模擬保育などを通して実感した。保育内容総論での模擬保育を例にすると、保育雑誌をお手本にしたと思われる指導案での制作活動などであり、他科目で学んだ知識や技術が薄く保育者の人数と子どもの人数の設定や行事設定であったり、保育所の設定であるにも関わらず平日の行事に保護者が参加することが想定されていたりするなど科目間の知識がつながっていないのである。そこで、2016年度に教育課程総論（講義）と保育内容総論（演習）、2017年度、2018年度には更に保育実習研究Ａ（演習）の担当者とも連携を取り学生の学びの深化を図った。2019年度には保育原理Ａ（講義）との学びの共有化を図った取り組みである。

２．問題と目的

学生の学びの意識として、各科目の単位認定に注視することは至極当然のことである。しかし、その先にある本来の目的は保育者になることであり、そのためには関連付けられた科目を総合的に学び保育者としての資質・能力を身につけることである。教育課程総論の課題として、学生にとって長期的な視野での計画を理解することが難しく、また総合的に５領域または幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を経験できる計画を立てることに困難さを抱えている。換言すれば、部分指導案など

執筆者紹介：中村学園大学短期大学部幼児保育学科
別刷請求先：〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1　E-mail：yu-sakurai@nakamura-u.ac.jp

の短期的な計画を立てて模擬保育を行うことは保育内容総論や保育実習研究Ａを通して授業内で理解し、実践できている。しかし、入園（入所）から修了までの長い保育の営みの視点で見ると点でしかなく、子ども達の成長・発達と各園の保育・教育方針や５領域を総合的にという視点は入っていないことが現状の模擬保育である。また、2019年度から関連を深めようと取り組んでいる保育原理Ａに関しては、保育制度や関係法令、保育の歴史と保育・教育思想家といった内容であり、学生にとっては暗記科目といった捉え方をしているところもある。保育を行う上で必要な知識であり、具体的には発達過程と子どもに対する保育者の人数や子どもに対する必要な広さなどの物的環境の基準、また現在の保育、保育所保育指針や幼稚園教育要領の成り立ちやその考え方に至ったこれまでの歴史を知り、子どもの最善の利益・子ども主体・遊びを通して・環境を通してといった保育の基本原理を根拠に子ども達と接していくために保育者として必要であるにもかかわらず、暗記科目といった認識があるのである。

そこで、長期的な視点で教育課程・全体的な計画の理解を深めることと実際の指導計画を立てる際に保育原理Ａで学んだ知識を根拠として取り入れることを通して保育の総合的な理解の深化に取り組んだ。

方法

【2016】教育課程総論と保育内容総論

教育課程総論において編成の手順や配慮事項、関係法令、発達過程や５領域について知識習得を中心に講義を行う。保育活動を分析する視点として、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の資料を配布した。この中で幼児教育における学びの過程としてポップコーンパーティーという活動が紹介されている。この資料では三角巾を身に付ける際に、四角い布を三角にすることを通して生活の中で図形の関心・活用につながることなどを具体的に５領域と関連させながら説明している。この視点をもとに他の活動場面の画像や映像も分析し、保育活動にどのような教育的意義があるのかを読み取っていく授業を行った（2017，櫻井）。

保育内容総論において、学生は行事についてのグループ発表を行った。ここでは例となる教育課程などを例示することなく、学生がねらいを設定して園行事を保育内容・保育活動として模擬保育を設定して発表を行う。発表後には学生同士の意見や授業担当者からの講評を行う。この時点では部分指導案というレベルであり、保育の一部分を切り出した活動の発表である。換言すれば、入園から卒園までという長期的な視点と５領域を総合的にという視点に不足が生じている。

【2017】教育課程総論と保育内容総論、保育所実習研究Ａ

教育課程総論においては、編成の手順や配慮事項、関係法令、発達過程や５領域について知識習得を中心に講義を行う。保育内容総論において、昨年は行事についてのグループ発表を行ったが、2017年度は保育実習研究Ａで行う模擬保育と同じグループ、同じ保育活動を発表した。ここでは例となる教育課程などを例示することなく、学生がねらいを設定して模擬保育を保育内容・保育活動として発表を行う。この発表ではなぜこの絵本を選んだのか、なぜこの導入を考えたのか、発達過程をどのようにとらえたのかということなどを活動の中で説明しながら発表を行う（2018，櫻井ら）。

保育実習研究Ａでは、日誌の指導や実習に関する指導も行うが、その一部として模擬保育を行っている。ここでは、先述の保育内容総論で行った発表の改善点や準備不足を補うとともに、説明などはせずに子どもの前での保育を想定して模擬保育を行う。その内容としては発達過程と活動（例えば、リズムあそび、製作活動、身体あそびなど）を学生が決め、それに沿ったねらいと内容を模擬保育として発表した。

教育課程の理解を深める取り組みとして保育内容総論の発表前に書き込み式のプリントを配布し、グループ発表後に振り返りを行った。プリントには「ねらい」、「活動内容」、「活動テーマ」を記入する。

【2018】教育課程総論と保育内容総論、保育所実習研究Ａ

2018年度は時間割の都合上、保育所実習研究Ａで模擬保育を行い、基本的にはその一週間後の保育内容総論でその改善やその後の活動を模擬保育として発表する。制作活動に偏りすぎないようにテーマを「運動遊び、伝承遊び、正月・干支、芋ほり遠足、秋の自然物、時の記念日、劇遊び、誕生会、七夕」の９つから選択するようにした（2019，櫻井ら）。

前年度の課題であった「どのように改善したか」については、発表について指摘した箇所などをメール伝えることとそれぞれの授業での学生のレジュメを手渡ししてもらった。そのレジュメにはそれぞれの教員からの指摘を学生が手書きで加筆したものであり、保育内容総論の発表ではそれらの資料を基に改善点を確認した。

教育課程・全体的な計画の理解を深める取り組みとして、「ねらい（領域）・活動内容・テーマ（行事）」を書き込むプリントを保育内容総論の授業で配布し、全グループ発表後に含まれる５領域の数を確認してその偏りを認識する。

【2019】教育課程総論と保育原理、保育内容総論、保育実習研究Ａ

2019年度の取り組みとしては、学生の負担軽減を更に考慮して10グループの発表を７グループに減らすこ

とと、保育実習研究Ａと保育内容総論での発表を１週間ではなく２週間の間隔をあけることとした。しかし、負担軽減と同様に重視されるべきこととして、それぞれの科目内での学びがあるので、７グループ中５グループは同テーマ、２グループはそれぞれの科目でテーマを設定した。保育原理での学びを知識として使うことを意識するために発表グループに対して、保育者の人数と幼稚園なのか保育所であるのかなどを指定してそれをもとに行事や保育活動を組み立てるように課題を設定した。

３．ま と め

授業改善に取り組んだ2016年度からの実践を各年度でまとめると以下のようになる。

2016年度の取り組みでは、学生にとって教育課程を理解するうえで入園（入所）から修了までという長い時間軸で保育を捉えることは困難なことであった。ましてや実習経験もない１年次生にとっては発達過程を保育所保育指針や教科書の文字のみの情報で理解することが困難なことは明らかである。教育課程総論の授業で文字を中心に知識と保育の捉え方を学んだり保育活動の中の教育的意義を読み取ったりすることで教育課程についてある程度の理解を促すことは可能である。後学期開講の保育内容総論の授業での発表を通し、演習と講義を架橋することで前学期開講の教育課程総論の理解深化に近づくのである。保育内容総論の発表ではねらいを設定し、年間行事を通してそのねらいを達成する保育内容・保育活動を組み立てる取り組みを行った。発達過程の理解の一助として、制作物を学年別に例示し、その違い（指先の発達に応じたのりやハサミの難易度、人間関係から見る個人製作や共同制作の違いなど）の根拠を保育所保育指針や教科書の説明と関連付けて説明して理解を促した。学生が発表したねらいと活動の一例として、

- こどもの日：こいのぼりと兜を折り紙で作って画用紙に貼り絵を描く。
- こいのぼりや兜を作ることを楽しみそれを遊びに使ったり、飾ったりする（表現）。
- 感じたこと、考えたことなどを自由にかいたりつくったりする（表現）。
- こいのぼり作りを通して友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう（人間関係）。

上記の活動のほかに、芋ほり遠足に行った後に絵を描いたり、クリスマスツリーを作ったり、節分で鬼のお面を作るなどの発表があった。一年間を通して並べていくと表現領域の絵画や制作活動が多いことが可視化され、ねらいや活動の偏りや不足に気付くのである。

もちろん学生段階では子どもの実態や、地域の実態、園の掲げる教育・保育目標といったものの現実に直面していないので、５領域が総合的に含まれていることや発達過程を踏まえているのかというところまでであり、その編成の材料に不足が生じているという問題もある。しかし、この教育課程総論と保育課程総論の架橋を通した取り組みで得た経験と知識が実践の場に出るための保育者としての意識向上に寄与したと考える。

2017年度の取り組みでは、保育内容総論と保育所実習研究Ａでの発表とプリントを通すことで、ねらいから保育活動を組み立てることの理解が深まったり、５領域の経験に偏りがあることに気づいたりすることができた。例えば、幼児保育学科４つのクラスにおいてほぼ同じ発達過程と活動の組み合わせで発表（10グループ）を行ったが、設定するねらいと活動テーマには違いがあった。その違い自体は当然のことである。学生の考え方の傾向として、活動を考えそれにあったねらいを探すことがある。しかし、今回はねらいからどのような活動が必要かを考えることができていた。例えば、「食育」についてあるグループは制作活動を通して食べ物や料理に興味を高めたり、野菜の栽培や調理を通して食への興味を高めたり、その後のお店屋さんごっこという活動を想定してそこにつながるように見通しをもって計画をすることができていた。そしてこのような発表を10グループが行い、プリントにねらいと内容のみを表に記入し比較した。そのねらいが５領域のどの部分に関連していたのかを振り返ったところ、各クラスでの違いとともにそれぞれのクラスでの領域の偏りに気付くことができた。各クラス10グループの発表内容のねらいに含まれる領域をみると、１クラスは健康６、人間関係７、環境５、言葉３、表現５、２クラスは健康７、人間関係６、環境４、言葉１、表現５、３クラスは健康８、人間関係５、環境３、言葉２、表現４、４クラスは健康６、人間関係５、環境５、言葉３、表現７。このように言葉の領域に関する活動が少ないことが分かった。

カリキュラムマネジメントとしてPDCAサイクルを考えると一年間の指導計画として改善の必要性と入園から卒園までと考える場合に、不足していた領域を卒園までに経験する必要性に気付くことができた。また、それと同時に不足する領域をなくし５領域を総合的に展開することができる教育課程とそれに伴う指導計画編成の重要性を理解できたのである。

入学当初の学生に「お店屋さんごっこ」について質問すると、「品物を作る」、「お金を作る」といった表面的な返答しかなかった。教育課程総論の授業を通して、「活動にはねらいがあること」やそのねらいは５領域とそれを基にした各園の教育課程のねらいが基になっていることを知識として理解する。また、発達過程を考慮し

た品物の制作や人間関係を基にしたお金のやりとりや役割分担などを理解していく。そして保育内容総論で、制作場面やその導入、お金にするのかチケットにするのかなどの保育者としての配慮や準備について解説を付けながら学生が発表を行う。この時点で、他の学生や教員から質問や不足、発達過程や子どものコミュニケーション能力などについて指摘や発表者自身の課題が出てくる。この課題を改善して保育実習研究Ａでは模擬保育を行うのである。本取り組みの目的でもある他科目との関連を意識するという点においても、学生は保育の様々な授業に取り組んでいるのだが、それぞれの授業の学びが独立して、もしくは並行している印象がある。幼児保育学科としてもカリキュラムツリーを示し、学生にも科目間のつながりと学びの統合を伝えているが、それぞれの単位を取得することに重心がある。そこで、保育内容総論や保育所実習研究Ａの授業内では具体的な科目名を出しながら意識を高めた。例えば先述の「お店屋さんごっこ」では、品物の制作においては保育内容表現造形の技術を使い、デカルコマニーやマーブリングでの模様付けにつなげること。また、役割分担や制作場面では発達心理学などで学ぶパーテンの遊びの分類に基づいて個人制作にするのか、共同制作が望ましいのかといった指摘や質問を投げかけることで、次第に学生自身が他科目での学びを関連付けながら発表準備を行えるようになった。

保育内容・活動を設定していくためには教育課程がもとにあり、そのねらいを達成していく保育内容を組み立てていくことが基本ではあるが、学生の発表から一年間の指導計画につなげ、その後教育課程を編成していくという逆の手順から進めていくことに意義もあるといえる。

2017年度の課題としては、保育内容総論と実習研究Ａの授業曜日が同一でないことで、祝日の関係で授業が前後することがあった。また、実習を意識した発表になることで、年間行事よりも保育実習期間に予想される内容に偏っている。これは他の実習研究と関連させることで改善可能である。更に教員同士が発表の改善点伝え合うことはできたが、実際に授業での発表を確認することができないなど課題は残った。

2018年度の取り組みでは、前年度の課題であった「どのように改善したか」については、発表について指摘した箇所などを教員同士がメールで伝えることとそれぞれの授業での学生のレジュメを手渡ししてもらった。そのレジュメにはそれぞれの教員からの指摘を学生が手書きで加筆したものであり、保育内容総論の発表ではそれらの資料を基に改善点を確認した。これによりこれまで学生が発表後に感じる反省や改善点について取り組みなおす機会を持つことができた。PDCA サイクルを授業内で実感できたのである。同じテーマで模擬保育の改善が図れることで、活動から保育を組み立てるのではなく、ねらいから活動を計画することの理解が深まり、教育的価値のみに重点を置くのではなく、子ども達は「遊びを通して」学んでいくことの重要性が理解できたと信じたい。また、2016年度からの取り組みにより、保育所実習研究Ａと保育内容総論の模擬保育を行っている時点では「部分指導」といった意識であったが、ねらいと内容を書き込むプリントで全発表が終わった時点で領域の偏りや不足に気づき、入園から修了までを総合的に計画する視点の養成には一定の成果につながっている。日々の保育がそれぞれの園の教育・保育方針の実現につながっているのか、つなげるために行事をどのように利用していくのか、またその計画作成の時に発達過程や５領域、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識していく手順理解が深まったのである。

そこで2019年度は「保育原理Ａ」の科目に対する暗記科目というイメージと意識を改革するべく授業改善に取り組んでいる。実際にはまだ後学期中であり結果までは出ていないのが現状である。保育原理Ａに含まれる保育・幼児教育制度や児童福祉施設最低設置基準、幼稚園基準をもとに、模擬保育での園の規模や園児数、また保育者の数や保育所、幼稚園ということを設定し、それをもとに学生自身がそれに付随する人数や日時、場所などを想定したり、模擬保育の活動内容が「遊びを通して」、「環境を通して」、「子どもの最善の利益」に合致しているのかを投げかけたりするなど科目間の連携を意識できるように言葉かけを行った。また、学生が発表する模擬保育の活動につながった保育の思想家の影響はあったのか、例えばルソーの影響を強く出すとどのように変化するのか、ペスタロッチの場合は、シュタイナーであれば、また思想家の影響がなくスパルタの時代であればなど暗記ではなく現代の保育の根幹に保育思想家の想いがつながっていることを理解しやすいように投げかけた。学生が学びたい内容と教員側が伝えたい内容をすり合わせ、より良い方法で授業を組み立てていくために今後も授業改善に取り組んでいくことが必要である。

引用文献

伊藤智里・秋政邦江・青井則子・尾崎公彦・入江慶太（2014）．総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ―領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連―．川崎医療短期大学紀要．34，29-37.

香川晴美・鈴木正和・伊藤潔志．（2013）．保育者の専門性としての発表能力とその育成―「保育・教職実践演習」を核

とした科目間連携に向けて―．三洋学園短期大学紀要．44，8-19
高橋さおり・清水桂子．保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討―「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して―．北翔大学短短期大学部研究紀要．53，89-95.
櫻井裕介．（2017）．幼稚園教育課程の理解を深める授業での取り組み―教育課程総論と保育内容総論の架橋を通して―．中村学園教職教育研究会抄録集．1，25-26.
櫻井裕介・川俣沙織．（2018）．幼稚園教育課程の理解を深める授業での取り組みⅡ－教育課程総論と他科目の架橋を通して―．中村学園教職教育研究．2，24-26.
櫻井裕介・川俣沙織（2019）．幼稚園教育課程・全体的な計画の理解を深める授業での取り組み―教育課程総論と他科目の架橋を通して―．中村学園教職教育研究．3，20-21.